



商工省工芸指導所と輸出工芸

著者	井上 祐里
雑誌名	藝叢：筑波大学芸術学研究誌
巻	30
ページ	45-54
発行年	2015-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2241/00147381

商工省工芸指導所と輸出工芸

井上 祐里

はじめに

商工省工芸指導所（以下、工芸指導所）（図1）は、昭和3（1928）年に設立された国立の工芸指導機関である。工芸指導所は、明治期から続いてきた高級工芸品による輸出工芸の衰退、「輸出向工芸品」として国内製品と区別して製作されていた粗悪品の横行から、実用的で安価で良質な産業工芸品の輸出への転換を図り、国内の産業工芸や地方工芸の振興、輸出工芸振興のための研究指導にあたった。

本稿では工芸指導所の仙台北所開設から昭和15（1940）年の東京本所開設までの戦前期に時期を絞り、同所の活動の中でも輸出工芸関連の活動を考察し、工芸指導所の活動が日本の輸出工芸の発展にどのように貢献したかを再検討する。また同時期の輸出工芸振興に関する取り組みについて、国内の展覧会や海外での展示会を中心に、どのような成果を挙げたかも合わせて考察する。なお文中では旧漢字を新漢字に改めている。

1 商工省工芸指導所設立までの流れと昭和の工芸

海外へ渡った日本の伝統工芸品は、明治政府として初めて参加した明治6（1873）年のウィーン万国博覧会への出品を契機に、海外で注目を集めることとなった。ウィーン万博で大成功を収めたことにより、政府は外貨獲得の有望な手段としての工芸品輸出に着目し、明治初期に行われた旧習打破の政策のために衰退していた伝統工芸産業を復興させた^①。

日本はその後も各国の博覧会に参加し、高い評価を得ていたが、明治16（1883）年のボストン博覧会 Foreign Exhibition, Boston では、改良を加えることなく米国においてすでに流行遅れとなった出品物により打撃を受けた^②。輸出工芸品においても明治14年頃から海外での売れ行きが落ち込み始め、国内の不況も相まって輸出工芸は衰退していくこととなる。

大正初期になると、工芸が産業振興の見地から重要視され、これを復興し、また奨励する施策が求められた。大正元（1912）年、農商務大臣牧野伸顕は東京高等工業学校長手島精一らに改善策を求め、手島らは「工芸振興に関する建議書」を提出した。この建議書では、一、本省に一般工芸に関する諸事項を掌理する一機関を置くこと 二、工芸審議会を設けて、一切の重要事項を審議すること 三、工芸品および意匠展覧会を開くこと 四、工芸品の図案懸賞募集を行い、受賞作品を試作し、海外へ試売すること 五、公私各博覧会の工芸審査には必ず関与すること 六、輸出関係国に、工芸の素養のある駐在官（商務官と同格）を置き、諸国の風俗、志向などを観察、報告させること 七、工芸博物館を設け、内外古今の美

術工芸品を蒐集すること等が挙げられた^③。この内、工芸品の意匠図案の改善発達を目的として、大正2（1913）年に第一回農商務省図案及応用作品展（通称農展、のちの商工展）が開催された。

明治期の博覧会の出品物は一品製作の美術工芸品で占められていたのだが、明治9（1876）年のフィラデルフィア万博後、同博覧会の事務官であった納富介次郎によって工芸の機械化が主張されている^④。これは実現には至らなかったが、その後大正期になると美術工芸以外の工芸観^⑤が確実に現われ始めた。安田祿造は大正6（1917）年に出版された自著で当時の工芸の分類に関して、「美術工芸と工業との中間に、更に工芸（美術的工芸に対し余は之を経済的工芸と称す）なる部門を置」くべきであると主張した^⑥。

1920年代から1930年代にかけては、工芸の概念が多様化していき、「新興工芸」「実在工芸」「民衆的工芸（民芸）」等、機能性・実用性・民衆性に新しい美を求める動向が生まれた。大正15（1926）年の『工芸時代』創刊号では、「吾が工芸界は、猶未だ所謂純粹工芸一点張りの観があつて甚だ物足りません、工芸の完全な発達を期するには、産業工芸も自用工芸も齊しく振興されねばならない」^⑦と、産業工芸としての工芸を認める主張がなされる。さらに同年には帝国工芸会が結成された。同会は、明治末から国粹主義を脱却して世界的潮流への一本化を進めた日本の工芸が、結局は価格競争に突き進み、後進工業国として模倣や低級品製造に甘んじた現状を打破することが目的であるとし、工芸の産業化、時代化、民衆化を提唱した^⑧。

このような中で昭和2（1927）年、商工省の予算に工芸指導所の創設費が計上された。この予算案は、時代に即した意匠の試みられた実用的な工芸品の量産で工芸の振興を図ることと輸出工芸の振興を目的としており、商工行政の新しい分野を開拓するものとして異議なく省議を通過し、大蔵省の査定に廻されたが、容易に賛同は得られなかった。そこで当時政治問題として大きく取り上げられていた東北振興策の一端とし、指導所を仙台に置くということで原案通り査定を潜り抜け、この案を成立させたのである^⑨。初代所長には当時、富山県立工業試験場長兼工芸学校長であった国井喜太郎が起用された。

2 商工省工芸指導所と工芸振興

工芸指導所における工芸品及び産業工芸の認識として、国井所長は「機能を第一義としその形態は機能の充足に随伴して生まれた結果」とするものを「工業品」、また「目的たる用の作因を満す形態が同時に我々の生活感情に於ても美的に評価され満足」されるものを「工芸品」と規定し、「産業工芸」はこの意味での「工芸品」が大量生

産され、機械を利用するもの、即ち工業的なものと説明している⁽¹⁰⁾。その上で、芸術的価値に主眼を置く美術品とは異なり、工芸は生活の実用上の要件を満たすとともに美的感情に訴えるものであると位置づけている⁽¹¹⁾。工芸指導所はこの定義のもと、工芸品の販路を広げる、あるいは海外進出を計るため、工芸の科学化、大衆化、輸出化を⁽¹²⁾、そして商品価値を高めるために工業品の美化を方針として掲げたのであった⁽¹³⁾。

工芸指導所は設立当初は木工品及び金属品の改善発達を目的としていたが、昭和12(1937)年8月に業務が「工芸品」全般の改善発達へと拡大する⁽¹⁴⁾。その業務は調査研究、試験鑑査、商品見本の試作、製作・加工・図案調製応需、伝習生及研究生の養成、審査及質疑応答、講習及講演会、設備貸与、刊行物頒布であり、指導方法は実物試作見本を展示しての啓蒙や、講習講演、機関紙や研究調査資料の発行を通しての工芸の普及宣伝であった⁽¹⁵⁾。

この内、機関誌の発行では、開設の翌年から工芸に関する論説、研究、資料又は情報等を収録した機関紙『工芸指導』を発行していたが、情勢への適合と一般への配布のため、昭和7(1932)年6月より月刊誌『工芸ニュース』(図2)の発行を始め、全国的な誌上指導へと力を入れていた⁽¹⁶⁾。

展示による啓蒙では、工芸指導所主催で研究試作品展覧会や開所記念展を開催する他、商工省貿易局主催輸出工芸展覧会や商工展等に研究試作品を出品していた。昭和8(1933)年に東京三越で開催された商工省工芸指導所研究試作品展覧会(図3)は、工芸指導所開所から五年間の研究成果を一般に示すものであった⁽¹⁷⁾。この展覧会にはドイツの建築家、ブルーノ・タウト⁽¹⁸⁾が来場したが、タウトは「良い物は何一つない」と酷評している⁽¹⁹⁾。しかしこれをきっかけとして、工芸指導所はタウトを顧問として招聘し、規範原型⁽²⁰⁾の製作(図4～5)が実現したのであった。

仙台に工芸指導所本所が設立されてから11年後の昭和14(1939)年1月、大阪府工業奨励館内に工芸指導所の大阪出張員事務室が設けられ、8月に同館内に関西支所が設置される。翌年12月には工芸指導所本所は東京西巢鴨に移され、仙台的施設は東北支所となり、工芸の全国指導の準備が整うこととなった。この時期は日中戦争のために国全体が戦時体制となり、様々な緊急措置が講じられ、工芸界においても戦争に向けた取り組みが強化された。昭和13(1938)年からは、軍需工業が優先されるようになり、工芸指導所は誌上指導や展覧会等を通じて輸出工芸品の高級化(図6)と代用品の研究指導(図7)を推し進めることになったのである。

この時期までに工芸指導所の関わった輸出振興活動を取り上げると、一つには海外の工芸事情の調査がある。

商工省は昭和5(1930)年から各地に調査員を派遣して販路開拓のための調査をはじめ、昭和7年から昭和8年にかけては国井所長自ら海外市場調査の一環として欧米の視察に赴いた⁽²¹⁾。また海外の工芸事情や趣味嗜好、展覧会出品物についての記事が『工芸ニュース』誌上に掲載され、海外派遣調査と合わせて当業者の製作の一助となった。

輸出工芸関連の展覧会では、輸出工芸品の改善と振興を目的として、昭和7年に官公立試験研究指導機関試作輸出向工芸品展示会(以下、試作品展示会)、翌年からは商工省主催輸出工芸展覧会(以下、輸出工芸展)が開催された。ここでは工芸品の海外進出を図ることを目的とし、商品価値に主眼が置かれた⁽²²⁾。同展は昭和13年の第六回展まで続き、翌14年10月からは商工展と合併し、第一回貿易局工芸品輸出振興展覧会(以下、輸出振興展)が開催された。

輸出工芸展で選定された陳列品は昭和8年設立の日本輸出工芸連合会によって海外の陳列会に出品された。昭和9(1934)年、10(1935)年にはパリのサロン・デザルチスト・デコラトゥール Salon des artistes décorateurs、昭和11(1936)年はニューヨーク、昭和12年、13年はシカゴ、昭和14年にはブエノスアイレスの日本品陳列会に出品されている。工芸指導所の作品では、昭和9年出品の鳥籠や、昭和13年の分解式三面鏡化粧台(図8)等が人気を博した。また昭和14年のニューヨーク万博の日本部では工芸指導所の試作品が大半を占めており、同年のシカゴランプ市でも試作品及び工芸指導所の指導による業者の見本品が多数出品され、工芸指導所の研究と指導の成果が見て取れる⁽²³⁾。

昭和12年からは、輸出振興策は輸出工芸品の高級化に方針を転換する。これは世界各国の邦品輸入防遏主義により輸出が減少していることを受け、安価多売の方針を捨て、輸出品の高級化を以て輸出総額の増加を図ろうとするものであった⁽²⁴⁾。昭和14年には工芸品のさらなる輸出振興を図る上での助言を求めるため、商工省貿易局は外国人デザイナーの招聘を企画する。これによって同年9月に、ドイツのティリー・プリル＝シュレーマン Tilly Prill-Schloemann⁽²⁵⁾、翌15年にはシャルロット・ペリアン Charlotte Perriand⁽²⁶⁾が招聘された(図9)。

以上のように工芸指導所は、素材や作品の研究とともに産業工芸や輸出工芸振興のための指導を進めていった。各地での講演や講習、展覧会開催や試作品制作、『工芸ニュース』による誌上指導等、啓蒙活動が主であったが、工芸の産業化、大衆化、輸出化及び工芸の美化を軸として多岐に渡る活動と全国的な指導で産業工芸の普及と輸出工芸の推進に取り組んでいったのである。

3 輸出工芸振興の成果及び評価

輸出工芸振興に関する工芸指導所の活動では、試作品制作と直接又は『工芸ニュース』誌上での指導及び啓蒙が主であった。以下では、工芸指導所の活動を中心とする輸出工芸振興に関する活動、展覧会の成果及び評価を考察する。

(1) 工芸指導所に対する評価

はじめに工芸指導所の展覧会の出品作及び指導への評価について考察する。

展覧会での工芸指導所の試作品出品は、展覧会という機会を通じて研究成果である作品を公開することによって業者の啓蒙指導を行うことを目的としており、出品物の海外への紹介や普及を目的としているものではなかった。とはいえ、各展覧会の出品物は海外での展示会に出品されるため、工芸指導所の試作品も出品先の風習や嗜好を考慮し製作されたものであった⁽²⁷⁾。

工芸指導所で開催された昭和8(1933)年の試作品展示会や昭和10(1935)年の第三回輸出工芸展では、試作品やその展示方法が評価される一方、工芸指導所の使命が何であるかが一般にうまく周知されていないこと、試作品もまだ発達段階であることが指摘されている⁽²⁸⁾。

関西支所開設に伴って昭和14(1939)年に大阪、京都、神戸で開催された研究試作品展覧会の際には、仙台の工芸指導所の仕事を、品物という形で関西の人々に広く認識させ、展覧会以降、質疑や依頼の持ち込みが増えたことがそれを証明していると評価されている⁽²⁹⁾。

同年には、輸出振興展の出品物の品種や大きさ、用途の違いが減少したことが工芸指導所の影響であるとの評価を受けている。一方で、この頃、各県の商品陳列所に並ぶ品物が似通っており、指導の実を結んでいない、「伝統の固有有色を亡失させる」との批判も出ているが⁽³⁰⁾、国井所長は、伝統技術を無視するのではなく、現代の商品を作るために伝統技術を維持したまま科学的研究を応用する必要があるのだと主張している⁽³¹⁾。工芸指導所の指導は次第に浸透し、全国的に波及したが、地方の工芸も盛んになると工芸品が統一的になり、それが工芸指導所の指導の結果だとみなされたようである。

時局下においては、国策として外貨獲得に主眼を置くようになったので、輸出工芸が重視されるようになり、工芸指導所の講習・講演の件数は増加したようであり⁽³²⁾、その必要性が認識され始めたと考えてよいだろう。工芸指導所の講習では基本となることを指導し、それによって各地方の受講者が商品を作り出すことになっているので、工芸指導所の指導の成果が商品に直接表れているかを判断するのは困難であるが、工芸指導所の研究の応用は各方面で見られるようであった⁽³³⁾。

以上のように海外の状況の把握が十分でない中で輸出工芸品を製作するには、工芸指導所の試作品や展覧会で高い評価を得たものを参考としていかなければならないため、各地の工芸品が似通ったとも考えられるが、伝統工芸に固執せず新しい工芸を模索していたことは各地の工芸の進歩的な姿勢の現れであるとも考えられる。また時局下における工芸、輸出工芸振興には指導が必要となり、必然的に工芸指導所がその中心的役割を果たすこととなる。戦争下での外貨獲得の最善策として輸出工芸振興が図られたことを、いきなりこれまでの工芸振興の成果として結びつけることは難しいが、非常時において頼るべき先が工芸指導所だったということは、工芸指導所の活動の拡大の結果だと見なしでもよいのではないだろうか。

(2) 国内状況

次に、全国的な輸出工芸振興策の一つであった輸出工芸展及び昭和7(1932)年の試作品展示会、昭和14(1939)、15(1940)年開催の輸出振興展の出品物に対する評価をもとに、輸出工芸品の試作品の改善がどのように図られたのかを検討する。

ここで改善されるべき輸出工芸品となったのは、輸出向けに作られた粗悪品が主であり、多くが実用品として輸出されるにも関わらず、実用にならないというものであった⁽³⁴⁾。昭和15年までにこの状態はほとんど変化しなかったが、輸出工芸展等は商品の試作品の製作によって、輸出工芸品の改善を模索するものであった。

昭和7年に開催された試作品展示会は、輸出品の改善につながる初の政府主催の展覧会であった。国井所長の所感では、出品物には依然として従来の輸出工芸品の概念にとらわれた品物が多く、科学的生産技術と科学的経営法の応用が不十分であると批判的である⁽³⁵⁾。しかしこの展示会は昭和初期の時点での課題点を明確にする役割が大きく、またその点においては十分に機能したと考えてよいだろう。

輸出工芸展の第一回展では、展覧会の趣旨の不徹底によりただ値段の安い物、旧習の改善のないものや一品製作のものが多かったが、昭和9(1934)年の第二回展では会の趣旨が徹底されてきた結果、改善が進み、極端なものは出品されず⁽³⁶⁾、翌年の第三回展も同様に、良品も現れているが、未だ課題を残しているといった状況であった。そのような課題としては、輸出向けの実用品と称しているが大量生産の見込みがないもの、日本人特有の繊細さが欠点となっているものが挙げられている⁽³⁷⁾。昭和11(1936)年の第四回展から昭和13(1938)年の第六回展にかけては、出品物に研究改善の成果が見て取れるが、大部分は商品化の水準には達していないことが指摘されている⁽³⁸⁾。第五回展では海外の視察員や通信員の調査によ

って海外事情が分かり、輸出の目標が定まりかけてきていることが作品上に現れてきたと評価されている⁽³⁹⁾。

かくして昭和14年には第一回輸出振興展が開かれた。出品物中には飛び抜けて優れた作こそなかったが、全体のレベルはかなり上がり、品種も豊富になったようである⁽⁴⁰⁾。翌年の第二回展では、「大衆の工芸品に対する関心を高める為」、東京府商工奨励館を会場にしていたものを日本橋の高島屋に移して開催されており⁽⁴¹⁾、更なる工芸振興が期待されていることがうかがえる。

このように輸出工芸展では試作品が出品され、回を重ねるごとに少しずつではあるが改善がなされたようである。出品作品は商品化の水準には達していなかったようだが、科学技術の応用や、仕向け地の趣味嗜好を考慮した出品等、粗悪な輸出工芸品からの脱却が図られていることがうかがえる。また試作品は改善されていたが、実際の輸出工芸品の改善は遅々としていた。それは昭和初期までに日本の粗悪品が海外各地に流布していたこと、外国の趣味嗜好や流行、生活様式、気候等が理解されていなかったことが大きな原因であったと考えられる。

(3) 国際評価

最後に海外における日本の輸出工芸品の評価を検討する。

まず、昭和8(1933)年の第一回輸出工芸展の出品物は、昭和9(1934)年に日本工芸品巴里陳列会としてグランパレで開催された、サロン・デザルチスト・デコラトゥール Salon des artistes décorateurs の日本部で、昭和9年の第二回輸出工芸展の出品物は同様に翌年の日本工芸品巴里陳列会で展示された。展示品は日本の文化的方面を知らせるものとなり、日本品は安物ばかりであるという認識を改めるには効果的だったようである⁽⁴²⁾。陳列会は好評で売れ行きもよかったが、一方で欧州の真似をしすぎているものや時代精神を無視したもの、品物の大きさや色彩の面で海外の生活に適さないものもあったと報告されている⁽⁴³⁾。

昭和11(1936)年にニューヨークで開催された輸出工芸展覧会、翌年の日本工芸品市我古陳列会の出品物は、好評を博したのもあったが、価格や材料の面で多くの欠点が見られ、欧米の生活習慣の研究不足から用途も不鮮明との批判を受けている⁽⁴⁴⁾。また山崎覚太郎の昭和12(1937)年のアメリカ視察報告では日本の漆器の評判や売れ行きが悪いという。どの漆器もほとんど販売されておらず、実用品として安価で売られているものも、売れ残っているというのである⁽⁴⁵⁾。それまで漆器は、素地が欧米の乾燥に耐えられないことから、曲がる、割れるといった問題を起こしていたが、それが改善されないまま輸出され続けていたのであった。アメリカへの輸出ではその他にも、昭和10(1935)年には技術的、意匠的にも欠陥

があるが、大量注文を受けると値上げをして不良品を売りつけることや、注文以上に商品を製造して供給過剰を招き、市場を壊すこと⁽⁴⁶⁾、翌11年には不良品の横行があると絶たないこと⁽⁴⁷⁾、また各国で輸出の取り締まりが不徹底で未検査品・検査不合格品の不正輸出さえも行われていることが報告されている⁽⁴⁸⁾。

昭和14(1939)年に開催されたアルゼンチンのブエノスアイレスでの展覧会は、南米での初の日本工芸展であり、展示会の詳細な報告は『工芸ニュース』誌上には見られないが、結果として出品物は好評だったようである⁽⁴⁹⁾。外貨獲得において南米は重要な市場と認識され、第一回輸出振興展はブラジル、第二回展はチリで開催された。しかし昭和15(1940)年11月から翌年6月にかけて水町和三郎が行った南北アメリカの工芸事情の調査報告によると、アルゼンチン市場において日本の陶器はほとんど見られず⁽⁵⁰⁾、ブラジルでも当時市場にあるものは廉価下級品が大部分で、市場も都会ではなく奥地向けになってしまっている状況が続いているようであった⁽⁵¹⁾。南米への工芸品輸出の改善点として、水野はアルゼンチンには各工芸専門技術官の海外駐在や輸出振興展の定期開催または日本品の常設館の設置⁽⁵²⁾、ブラジルへの輸出においては輸出監督を厳重にし、現地駐在技術員に監督指導に当たらせる必要があると述べている⁽⁵³⁾。この報告のように、海外で陳列会が定期的に開催され、優秀品も出品されているにも関わらず、毎回開催地が異なるためその場限りで終わってしまい、日本品（特に優秀品）を根付かせる取り組みは不十分だったようである。

以上のように日本の工芸品は海外において、展覧会でも実際の輸出品でもあまり評価は芳しくなかった。輸出されているものは改善されないままで、安物の粗悪品が出回り続けていたために、欧米各国での評判はかなり低調なものとなっていた。展覧会、陳列会出品物は年々改善されており好評のものもあったが、海外の生活様式や趣味嗜好を十分に作品に取り入れていないものも多かった。

一方で、手工芸品や日本で使われている生活用品は評価されていた。昭和13(1938)年にドイツ、ベルリンで開催された第一回国際手工業博覧会では日本の手工芸品、日用品が展示され、「今までかういふ品物は日本から来たことがない」「もっと早く出してくればよかった」と評価されている⁽⁵⁴⁾。昭和15年に来日した先述のプリル＝シュレーマンも、日本国内には優れた工芸品があるにも関わらず、「一品一例すら欧米に輸出されてゐない」と痛烈に批判している⁽⁵⁵⁾。日本に優秀なものがあるにも関わらずそれが輸出されていないというのは、やはり「輸出工芸品」というものに安物のイメージがつきまとい、それが払拭されていなかったことが原因であり、また国内的に見て産業工芸品の発達がまだ不十分であったことにも

よると考えられるだろう。

おわりに

これまで述べてきたことから、工芸指導所の輸出工芸に関する活動は、試作品の製作及び展示、他の工芸機関の指導、啓蒙によって輸出工芸振興に寄与したところが大きいと考えられるが、実際に昭和初期から戦時期にかけての輸出工芸品の状況にはあまり変化がなかったと言える。国井所長は仙台本所時代の工芸指導所の活動について、「抽象的には見る工芸を使う工芸としての概念を植え付けた事、又工芸を商品として研究を進める為、産業工芸と云う名称が重視されるに至った事は実績とも云えよう。」と回想しているが、「私の在任中何等具体的の実績を挙げ得られなかった事は申し訳ないと思う。」と述懐しているように⁽⁵⁶⁾、形としての成果は得られなかったものの、工芸指導所は指導啓蒙、試作品の制作、展示によって国内の展覧会での製作者の意識改善、海外での陳列会による輸出相手国の日本品に対する認識の改善に大きく貢献し、その活動は産業工芸品による輸出工芸振興の基盤を作ったのではないかと考える。また工芸指導所関西支所、東京本所が完成するまでの仙台本所時代は、東北からの指導ということで全国的な指導は不十分であり、初期にはその活動が正確に認識されていないようであったが、指導所の活動の全国的な認知と指導には『工芸ニュース』が大きく貢献し、誌上での指導や海外、国内各地方の工芸事情を知らせたことは産業工芸、輸出工芸の発展に寄与したと言ってよいだろう。

輸出工芸展等の展覧会に出品されていた各機関、業者の試作品に関しては、年々改良はされていたが、海外の展示会では非難されるものも多かった。しかし輸出先が一定でないため作品の傾向が毎年少なからず異なり、各国の趣味嗜好に合った輸出品の製作に努めようとする姿勢の変化を評価するととどまるものの、各地の製作に対する意識改善は認めることができる。

以上のように、工芸指導所の活動の成果と国内の輸出工芸振興の成果は、直接の輸出工芸品の変化ではなく、その過程である試作品の変化とその製作態度に現れたものであったと結論する。

-
- (1) 出原栄一『日本のデザイン運動 [増補版] インダストリアルデザインの系譜』、ベリかん社、1992年、59頁。
 - (2) 永山定富編『海外博覧会本邦参同史料』第三輯、博覧会倶楽部、1928年、16頁。
 - (3) 工業技術院産業工芸試験所編『産業工芸試験所30年史』、1960年、15頁。
 - (4) 出原栄一、前出、65頁。森仁史監修『叢書・近代日本の

- デザイン1』、ゆまに書房、2007年、80-82頁、85頁。
- (5) 近代日本における「工芸」の概念の成立については、北澤憲昭『美術のポリティクス——「工芸」の成り立ちを焦点として』(ゆまに書房、2013年)を参考にした。
- (6) 安田祿造『本邦工芸の現在及び将来』、廣文堂書店、1917年、9頁。
- (7) 北原義雄編『工芸時代』1巻1号、アトリエ社、1926年12月、3頁。
- (8) 帝国工芸会編『帝国工芸会沿革誌』、折戸喜三郎、1943年、161-163頁。藤山雷太「創刊を祝して」、青木利三郎編『帝国工芸』1巻1号、帝国工芸会、1927年5月、6頁。
- (9) 国井喜太郎「工芸指導所の歩んで来た道」商工省工芸指導所編『工芸ニュース』17巻2号、1949年2月、4頁。
- (10) 国井喜太郎「産業工芸品の意匠家」商工省工芸指導所編『工芸ニュース』5巻2号、1936年2月、1頁。
- (11) 国井喜太郎「本邦工業の工芸的進展を望む(承前)」『工芸ニュース』1巻4号、1932年9月、1-2頁。
- (12) 国井喜太郎「工芸指導所の歩んで来た道」、前出、4頁。
- (13) 国井喜太郎「本邦工業の工芸的進展を望む(承前)」前出、1頁。
- (14) 工業技術院産業工芸試験所編、前出、234頁。
- (15) 国井喜太郎「工芸指導所の歩んで来た道」、前出、4頁。
- (16) 「巻頭言」商工省工芸指導所編『工芸ニュース』1巻2号、1932年7月、頁付けなし。
- (17) 「工芸指導所研究試作品展覧会概況」『工芸ニュース』2巻9号、1933年9月、2頁。
- (18) ブルーノ・タウト Bruno Taut (1880-1938)。ドイツの建築家であり、ドイツ工作連盟の同人。昭和8年5月にナチスに追われて亡命し、来日する。同年11月から4か月間工芸指導所の囑託となる。工芸指導所に着任して3ヶ月を経ても根本的な改革が行われなかったため、昭和9(1934)年3月に工芸指導所を去る。(工業技術院産業工芸試験所、前出、31頁。)
- (19) 国井喜太郎「工芸指導所の歩んで来た道」、前出、6頁。篠田英雄訳、ブルーノ・タウト『日本-タウトの日記-一九三三年』岩波書店、1975年、330頁。
- (20) 規範原型とは、ドイツ工作連盟の理念に則した量産品のための規範である。(工業技術院産業工芸試験所、前出、30頁。)
- (21) 国井喜太郎「欧米工芸研究行脚の出発に際して」『工芸ニュース』1巻6号、1932年12月、2頁。
- (22) 国井喜太郎「第廿二回商工展鑑査所感」『工芸ニュース』4巻5号、1935年5月、1頁。
- (23) 工業技術院産業工芸試験所、前出、34頁。
- (24) 「内外工芸産業情報」『工芸ニュース』6巻9号、前出、37頁。
- (25) 「シュレーマン夫人の来朝と内地視察旅行」『工芸ニュース』8巻12号、1939年12月、8頁。<http://unit.aist.go.jp/>

tohoku/techpaper/pdf/1174.pdf を参照した（2015年1月23日閲覧）。

- (26) シャルロット・ペリアン Charlotte Perriand (1903-1999)。1927年にル・コルビュジエとピエール・ジャンヌレのアトリエに入所し、住宅の内装と設備を担当する。1937年に同アトリエを辞職し、1940年に商工省の招聘を受け来日。（北代美和子訳、シャルロット・ペリアン『シャルロット・ペリアン自伝』、株式会社みすず書房、2009年、作者略歴より。）工業技術院産業工芸試験所、前出、36頁。
- (27) 国井喜太郎「輸出工芸展本所出品物に就いて」商工省工芸指導所編『工芸ニュース』4巻10号、1935年10月、1頁。
- (28) 西海幸一郎「国立工芸指導所試作品展覧会を見て」青木利三郎編『帝国工芸』7巻8号、帝国工芸会、1933年9月、20-21頁。
- (29) 「新年を迎ふる工芸界回顧展望座談会」『工芸ニュース』9巻1号、1940年1月、30-31頁。
- (30) 池田美明編『輸出工芸を語る』、日本輸出工芸連合会、1940年、17頁。
- (31) 「商工省主催第六回木漆金工関係技術官会議開かる」『工芸ニュース』9巻6号、1940年7月、7-8頁。
<http://unit.aist.go.jp/tohoku/techpaper/pdf/1268.pdf> を参照した（2015年1月23日閲覧）。
- (32) 「講習・講演を通じて見た『時局下の地方工芸事情』座談会記」『工芸ニュース』9巻4号、1940年4月、22頁。
- (33) 同前、25頁。
- (34) 「第一回貿易局工芸品輸出振興展覧会概況」『工芸ニュース』8巻11号、1939年11月、7頁。
- (35) 国井喜太郎「輸出向工芸品展示会の成績に鑑みて」『工芸ニュース』1巻5号、1932年10月、1-2頁。
- (36) 国井喜太郎「昭和九年商工省輸出工芸展覧会出品物鑑審査所感」『工芸ニュース』3巻10号、1934年11月、1頁。
- (37) 「輸出工芸展出品物に対する外人批評」『工芸ニュース』4巻11号、1935年11月、11頁。
- (38) 国井喜太郎「輸出工芸展審査後感」『工芸ニュース』5巻11号、1936年11月、1頁。
国井喜太郎「輸出工芸展所感」『工芸ニュース』6巻11号、1937年11月、1頁。
<http://unit.aist.go.jp/tohoku/techpaper/pdf/0879.pdf> を参照した（2015年1月23日閲覧）。
- 国井喜太郎「第六回輸出工芸展審査講評」『工芸ニュース』7巻11・12号、1938年12月、8頁。
<http://unit.aist.go.jp/tohoku/techpaper/pdf/1041.pdf> を参照した（2015年1月23日閲覧）。
- (39) 国井喜太郎「輸出工芸展講評 出品物一般に就て」宮下孝雄編『帝国工芸』12巻11号、帝国工芸会、1937年10月、17頁。
- (40) 「新年を迎ふる工芸界回顧展望座談会」、前出、26-27頁。
- (41) 「第二回貿易局工芸品輸出振興展覧会概況」『工芸ニュー

ス』9巻7号、1940年8月、12頁。

<http://unit.aist.go.jp/tohoku/techpaper/pdf/1282.pdf> を参照した（2015年1月23日閲覧）。

- (42) 同前、13頁。和田三造「巴里に於ける日本工芸展覧会報告」『工芸ニュース』3巻7号、1934年8月、5頁。
<http://unit.aist.go.jp/tohoku/techpaper/pdf/0260.pdf> を参照した（2015年1月23日閲覧）。
- (43) 和田三造「巴里に於ける日本工芸展覧会報告」、前出、3-6頁。
- (44) 日野厚「紐育に開かれた輸出工芸展出品物の技術的方面」『工芸ニュース』5巻6号、1936年6月、14-16頁。「日本輸出工芸品市俄古陳列会の反響及出品に対する批評」『工芸ニュース』6巻8号、1937年8月、9-10頁。
<http://unit.aist.go.jp/tohoku/techpaper/pdf/0829.pdf> を参照した（2015年1月23日閲覧）。
- (45) 山崎寛太郎「米国に於ける日本の漆器 第1信」『工芸ニュース』6巻2号、1937年2月、2-3頁。
- (46) 「内外工芸産業情報」『工芸ニュース』4巻5号、1935年5月、24-25頁。
- (47) 「内外工芸産業情報」『工芸ニュース』5巻1号、1936年1月、34頁。
- (48) 「内外工芸産業情報」『工芸ニュース』5巻8号、1936年8月、35頁。
<http://unit.aist.go.jp/tohoku/techpaper/pdf/0654.pdf> を参照した（2015年1月23日閲覧）。
- (49) 「内外工芸産業情報」『工芸ニュース』8巻6号、1939年6月、36頁。
<http://unit.aist.go.jp/tohoku/techpaper/pdf/1142.pdf> を参照した（2015年1月23日閲覧）。
- (50) 水町和三郎・商工省貿易局『南北亞米利加の工芸概観』、日本輸出工芸連合会、1941年、26-27頁。
- (51) 同前、119頁。
- (52) 同前、53頁。
- (53) 同前、120頁。
- (54) 池田美明編、前出、13-14頁。
- (55) 「シュレーマン夫人の来朝と内地視察旅行」、前出、8-9頁。
- (56) 国井喜太郎「工芸指導所の歩んで来た道」商工省工芸指導所編『工芸ニュース』17巻2号、1949年2月、6頁。

図版典拠

- 図1 工業技術院産業工芸試験所『産業工芸試験所30年史』、ゆまに書房、2010年、16頁。
- 図2 商工省工芸指導所編『工芸ニュース』5巻1号、1936年1月、表紙。
- 図3 松戸市教育委員会（森仁史）編『ジャパニーズ・モダン 剣持勇とその世界』、財団法人松戸市文化振興財団、2004年、41頁。

- 図4 同前、52頁。
図5 同前、48頁。
図6 工業技術院産業工芸試験所、前出、
図7 工業技術院産業工芸試験所、前出、101頁。
図8 松戸市教育委員会（森仁史）編、前出、54頁。

（付記）

本稿は、平成25年度筑波大学芸術専門学群卒業論文「商工省工芸指導所と輸出工芸」に基づき、大幅な加筆訂正を加えたものである。

（いのうえ・ゆり）

※平成25年度筑波大学芸術専門学群長賞受賞

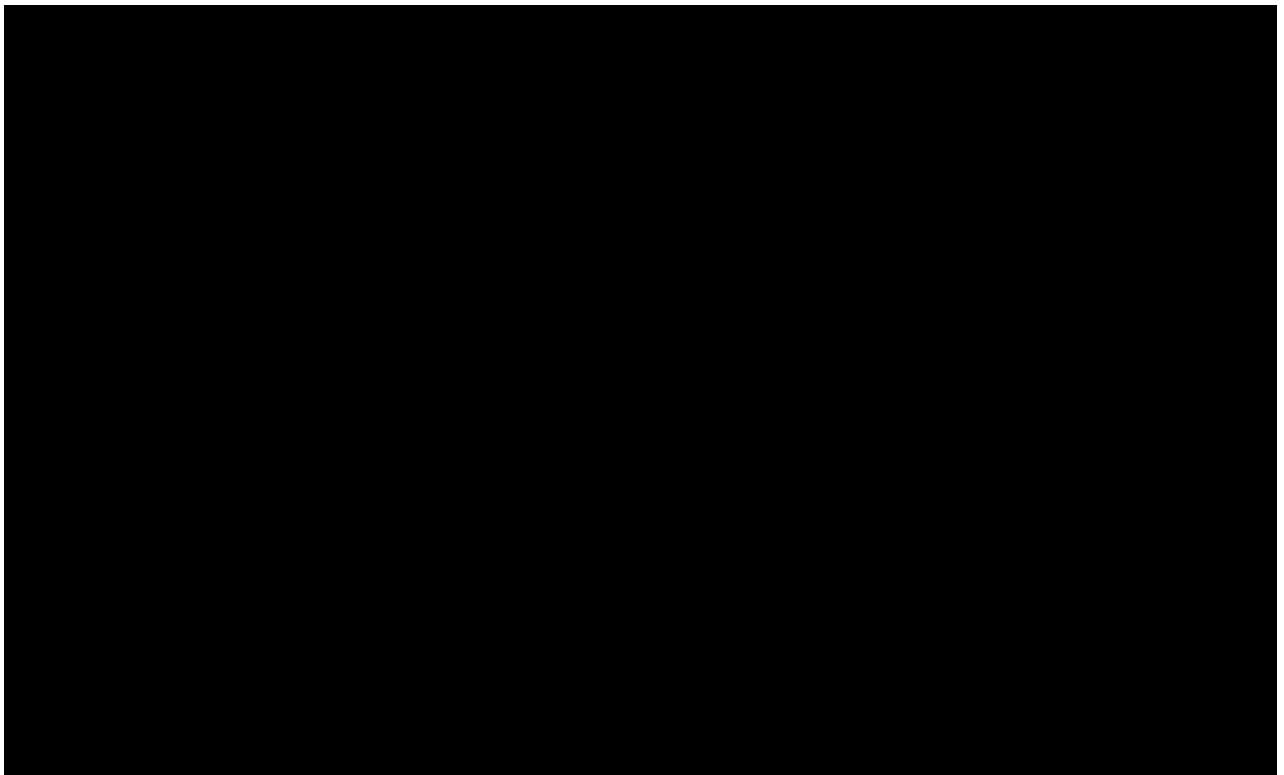


図1 創立当時の商工省工芸指導所の庁舎正面



図2 機関誌『工芸ニュース』

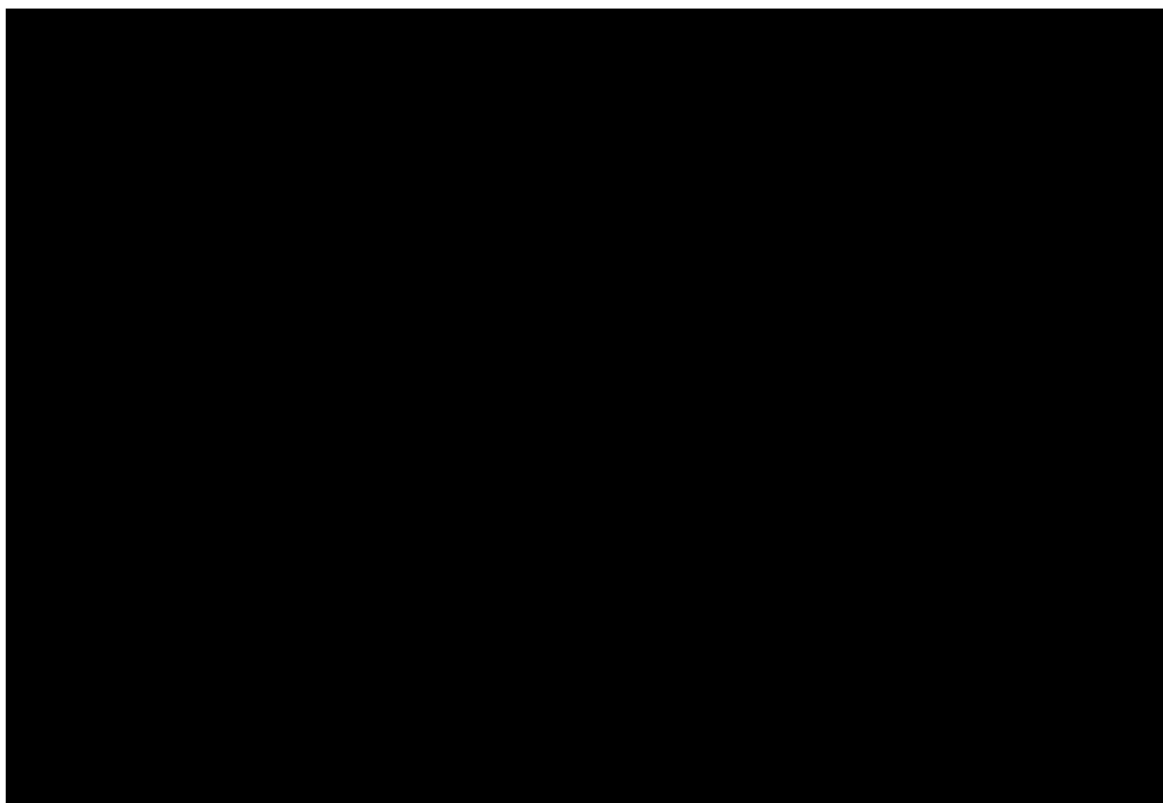
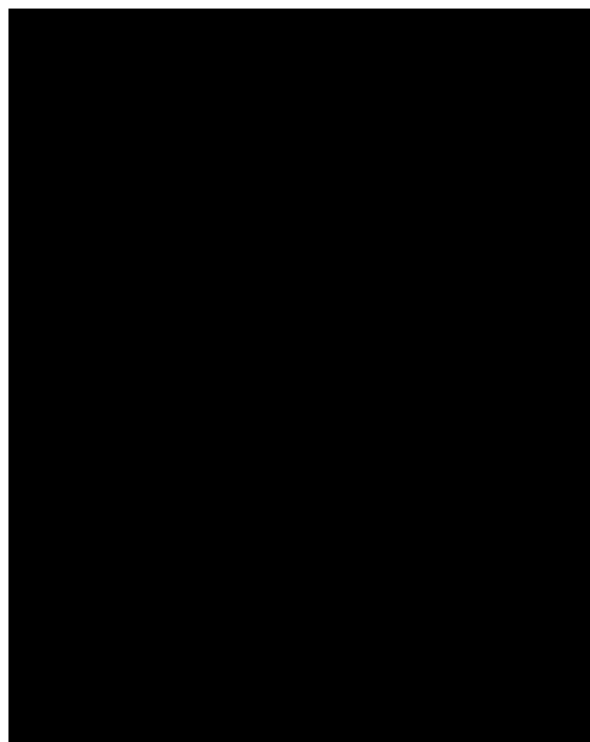


図3 工芸指導所研究試作品展覧会に来場したタウト夫妻（左二名） 1933年
 印画紙 12.0×16.8 産業技術総合研究所東北センター



原型デザイン ブルーノ・タウト
 「卓上照明具モデル1・B」
 真鍮、アクリル 工芸指導所
 47.6×48.8 仙台市博物館



図5
 デザイン 工芸指導所
 「椅子の規範原型 タイプC2」
 檜、鉄 工芸指導所
 39.7×47.2×78.6 仙台市博物館



図6 工芸指導所研究代用品試作例
竹製ナイフとフォーク



図7 工芸指導所《分解式三面鏡化粧卓子》 1937年

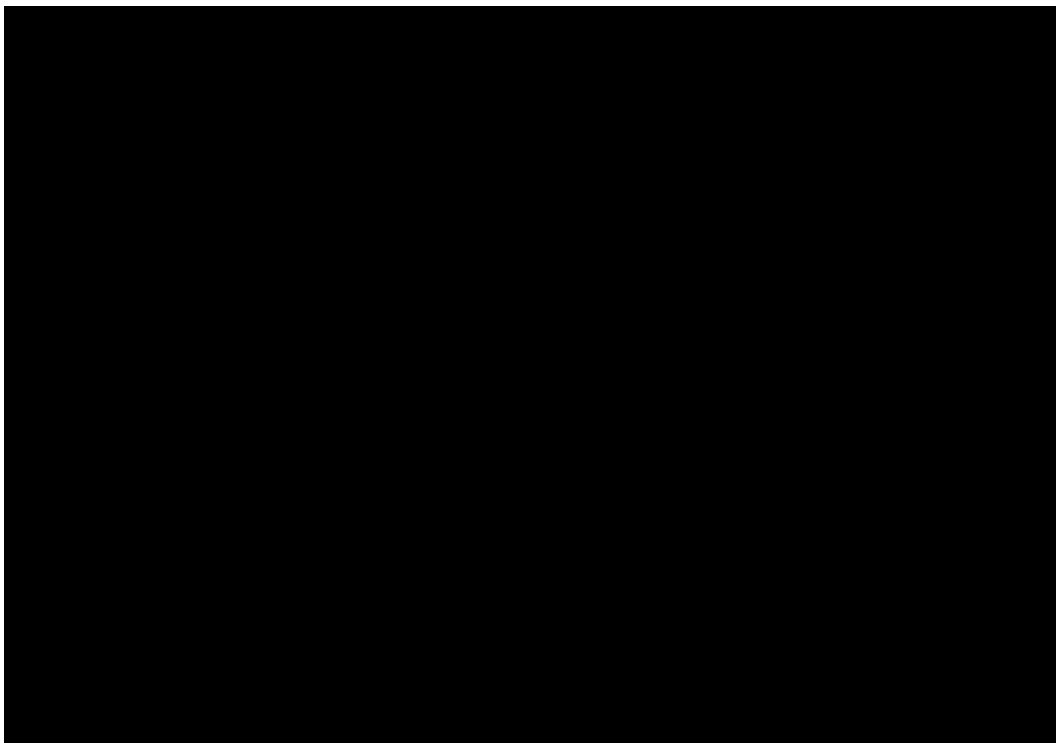


図8 工芸指導所でのペリアン 1940年 産業技術総合研究所東北センター